

文部省

高等
女子
讀本
卷

女子用



目 録

第一課 讀書	一	第十六課 ホアソナード君の歸國を送る詞	七
第二課 子湯の舟	六	第十七課 我が國の家庭	七十四
第三課 すゝき原	九	第十八課 道德と法律	七十六
第四課 養蟲	十	第十九課 田園の自然	八十
第五課 渡り鳥	十四	第二十課 我が家	八十二
第六課 伊藤博文	二十一	第二十一課 春を待つ歌	八十八
第七課 國寶	二十八	第二十二課 世界の航路	九十一
第八課 音樂	三十一	第二十三課 手紙の認め方	九十八
第九課 東西雜話	三十七	第二十四課 畫師の苦心	百一
第十課 乾物屋	四十三	第二十五課 ローマの舊都	百六
第十一課 歸宅の日取を申し送る	四十七	第二十六課 大樹	百十三
第十二課 税所教子	四十九	第二十七課 園藝	百十八
第十三課 雪	五十三	第二十八課 愛	百二十二
第十四課 賢母の教	五十七	第二十九課 峠の茶屋	百二十四
第十五課 詠史十首	六十七	第三十課 國語と愛國心	百三十一

高等小學讀本 女子用卷四

第一課 讀書

我等は何のために學校に學ぶか。いふまでもなく智能を啓發し、徳器を成就するがためである。然らば學校を卒業すれば、我等の智徳は十分であるか。否々、學問には際限がない。學校で學ぶ知識は九牛の一毛にも過ぎない。至善至徳の域に達するのは、畢生の力を盡くしても及び難い。學校は智徳の基礎を造る處に過ぎないから、我等は一生を通じて修養に力め、其の大成を期せねばならぬ。

若し學校を卒業しただけで、更に進んで自己の修養に志さなければ、將來の進歩は望まれないのみならず、折角學校で築いた基礎までもうちこはして、あたかも多年の修業をむだにしてしまふ。學校を卒業してそれぐの職業に就いて後も、常に學校に在る時と同じ心持で、絶えず自己の智徳を進めようと力めて行く人にして、始めてりつばな國民となり得られるのである。それこそ學校にはいつた目的にもかなふし、國家が學校を建てた趣旨にも合するのである。

社會に出て實務に當れば、學校で學んだだけでは足りないことを悟る場合もあり、又學校では全く學ば

なかつた事柄に出會ふ場合も多いに相違ない。世には實世間活社會に入れば、實世間活社會が即ち種々の事柄を教へてくれると言ふ人もある。これも一應もつともなことではあるが、何時も世間からの教を待つばかりでは不十分である。他の教を待たず、常に自ら進んで自己を教育する覺悟がなくてはならぬ。學校で接觸した師友が何時も傍に来て注意や指導をしてくれるものではないから、先生や友人と同様に依頼することの出来る忠告者を求める必要がある。それは何かと言へば、書物である。書物は我等の修養を助ける大切な師友である。

讀書を少數の學者の仕事と思つた時代は既に過ぎた。今は國民一般が讀書によつて各自の智徳を磨くべき時代である。身分職業の如何にかゝはらず、學校で得た讀書力を活用して常に自己の業務に關する知識を進め、自己の品性を高め、趣味を高尙にすることが必要である。必ずしも程度の高い書物を讀めといふのではない。それぐの業務嗜好に應じて適當な書物を讀む中には必ず何等かの修養を積み、いくばくかの利益を受けるのである。

昔は書物が少くて、一冊の書物を求めるためにわざわざ遠方に出掛け、又は人の藏書を借りて夜も寝ずに寫

讀書文四
讀書文四

し取つて勉強したといふやうな話がいくらもある。今はどんな田舎でも、大抵の書物は得られぬことはない。又忙しくて讀書の暇がないといふ人も往々あるが、心掛一つで、毎日いくらかの時間を讀書のために割くことは、むづかしい事ではない。本居宣長にも、

をりぐに遊ぶいとまはある人の

いとまなしとてふみ讀まぬかな

と詠じた歌がある。

こゝに甲乙の二國があつて、甲國の國民の大多數は爭うて自己教育のために讀書するのに引きかへ、乙國の國民は何等讀書に興味を有しないとすれば、兩國の國

民の將來に於て、どれだけの差が生ずるであらうか。さればこそ今日文明國に於ては、到る處に各種の圖書館を設立し、國民に讀書の便宜を與へることを競つてゐるのである。

第二課 干潟の舟

風に逆らひて舟をやるには、間切る。といふ工夫もあり、流に逆らひて舟を進むるには、押切る。といふ意地もあり、唯春の日の潮のそこりて、遠淺の海の悉く干潟となりたる時のみは意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の煎らるゝものなり。曾て此の事を言出でて、然る折にも何とか爲すべき手

段ありや。と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人うち笑ひて、何時にても纜を解かんとならば、何時にても水ある處に舟を繋ぐべし。我等は繋ぐ時に解くことを思ひて繋ぎ、解く時に繋ぐことを思ひて解く。素人は繋ぐ時は解くことを思はず、解く時は繋ぐことを思はず。こゝを以て歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干潟にあせるやうの事もあるに至るなり。若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段のあるべき、たい少しは早くとも、心のどかに食事など濟ませて、さてやがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟

の中を取片附け、尙それにてても時餘らば、舟道具を丁寧
に検め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは
愚しけれども、潮を待たぬよりは賢きわざなり。何時か
一度は爲さでかなはぬ事を爲しつゝ、待たば必ず來べ
き潮を待つに、大抵其の事は爲し果つるにも至らで、潮
ははや忽ちにして來るものなり。何時か一度爲さでか
なはぬ事は、小さき舟の中につきてもいと多きものな
れば、潮待つ間に爲すべき事のなしといふはなし。潮待
つ間に爲すべき事あるを見出して之を爲さば、たゞ時
の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の煎らるゝこと
などあるべくもなし。といひけり。おもしろき言葉なり

と思ひしかば、今に忘れず。幸田成行「潮待ち草」に據る

第三課 すゝき原

一

雲かゝる

高嶺より

吹下す

秋風に

果もなく

なびきわたりて

波なせる

はなすゝき。

二

一筋の

中みちを

稀に行く

人と馬

沖へ漕ぐ

小舟の如く

見る中に

かくろひつ。

三

霧たてば

風絶えて、

日はかげり、

山見えず。

ほのじろく

たゞほのじろく

海なせる

すゝき原。

第四課 蓑 蟲

我が國の歌人は、秋風の吹來る頃となれば、蓑蟲が、ちゝちゝ又は「父戀し」となくと思つてゐる。實際此の蟲が鳴いたら、秋の寂しさに一種の詩味を添へるであらうが、あやにく蓑蟲には何等の發音器もない。木の葉や皮を

かむ音をマイクロフォンで聴取つたら、或は、ちゝちゝと聞えることもあらうけれども、通常我々の耳には聞えるものでない。故に多分想像に富んだ歌人が、他の蟲の鳴くのを蓑蟲と聞誤つたものであらう。これはみゝずを「うたひめ」などと呼んで、夏の夜、じいゝと鳴くやうに思つてゐるが、鳴いてゐる處を掘つてみると、意外にもおけらが飛出す、それと同じことである。

蓑蟲は蛾の幼蟲で、我が國に凡そ七種居る。此の蟲は自分のすみかとして、口から絲を吐き、木の葉や皮又は小枝を綴り合はせて袋をこしらへる。さうして木の枝などにくつついてゐる。此の袋の内面は、絹で裏打したや

うに滑らかになつてゐる。外見が蓑のやうなので、蓑蟲といふ。此の袋の構造も、種類によつてそれと違つてゐる。木の枝を縦に並べたものの横にしたもの、螺旋狀にしたもの、木の葉を集めたもの、木の皮を綴つたものなど、いろいろある。しかし總べての袋に共通な性質は、其のすみかの近傍にある物にまねて鳥などの目を欺くやうにしてあることである。即ち擬態の好い例として、生物學上有名なものになつてゐるのである。

此の袋を開いて見ると、中に居るのは、いも蟲かしやくとり蟲を短くしたやうな、太つた小さい蟲である。頭と胸は黒く、堅く、腹は軟かて灰黃色。胸部には三對の脚、腹

部には五對の脚がある。疑もなくこれ蛾の幼蟲である。此の幼蟲は袋の中で蛹となる。此の蛹は袋のさきを破つて半分ばかり出て、蛾になつて飛出すのであるが、それは皆雄である。其の蛾を、みのがといふ。通常羽を廣げた大きさは六七分の黒い蛾である。

雌は一生を袋の中に暮して、一種隱遁的の生活をする。飛ぶ必要がないから、羽もなく、又食物を取る必要もないから、口も極めて不完全である。雌は數百の卵を自分のすみかとする袋の中に産み、やせ衰へて死んでしまふ。卵は翌年の夏の初孵つて幼蟲となる。(谷津直秀趣味の動物ニ據ル)

第五課 渡り鳥

私たちが七つ八つの頃
には、そろ／＼秋が更け
て来ると、晴れきつた空
を毎日のやうに雁が渡
つた。私たちはそれを見かけると、吹き
さらしの野路に立つて、空の一方を
仰ぎながら、雁よ、竿になれ。竿になつ
たら、鉤になれ。と、其の長い行列が漸次に雲
の中にじみ込んでしまふまで、聲をから
して叫んだものだ。が、今では雁も少くなつ



高嶺女四
高嶺女四

て、晝間其の長い列が空を渡ることとは、よく／＼人氣遠
い野原か何處かでないと、めつたに見られなくなつた。
其の頃は又うちの後の岡に行つてみると、葉の落ちか
かつた雑木林に、小鳥がたくさん来てゐたものだ。
秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色がかつて来よ
うといふ頃、私たちは、どうかすると暖い日の午過、そこ
らの木立で甲高い鋭いもずの聲を聞くことがある。あ
あ、もう秋だな。と思はず振返つて見ると、小さな櫟にま
じつてづぬけて背の高い榆の木にも、一羽止つて、
黄いろい夕日を受けて、羽莖が金のやうにきら／＼し
てゐるのが見える。私たちは其の瞬間、言ひやうのない



強い健かな氣持が
胸に流れるのを覺
える。

次にはひたきが來
る。山家の午過、ものうさうなこぼろぎの聲も何時の間
にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと
耳に入る。静けさの底に、何處からともなく微かな聲が
漏れて來る。すると木陰の萑、畠か何處かで餘念もなく
せつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を上
げる。其の拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうに、小
鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。それが

ひたきだ。

此の鳥は、まるで悲哀を懷いてゐる人のやうに、大抵は
連に離れて唯ひとり出て來る。さうしてそこの小
枝に止ると、ひよくりと軽いお辭儀をして、さゝや
くやうな聲で歌ひ出す。

ひたきが來て、ものの十日とたぬ間に、四十雀が來る。
此の鳥はひたきと違つて、十羽も二十羽も群をなして
來る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でも降る
やうに、細かい羽音がさつと空をかすめて聞える。さう
してそこの木立に下りるとすぐに、めまぐるしい程
すばしこくそこらをつゝき廻しながら、鼠色の背をそ

らし、柔かみのあるまるい胸を見せて、銀の鈴を振るやうな透きとほつた聲で、早口にしゃべり續ける。斯うした大きな群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色のうぶ毛そのまゝの雛がまじつてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙返することもあるが、そこはまたなれたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で木はだのひびをついたりする。

小雪がちらつく頃になると、みそさゞいが来る。これはひたきと同じやうに、大抵ひとりぼっちで、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬の初の午過山近

い田舎の小家で、ぢいさんは火

ほゝじろ



みそさゞい

しぎ



らづう

燵にもぐり込んでこくりくと居眠をする。其の側ではあさんへせつせと、絲車を繰つてゐる。すゝけた障子に、軒につるした干菜の影がみすぼらしくうつつて、時折小鳥の影がちらついたりする。どうかして絲目が切れて、眠さうな錘の音がばつたり止むと、こそくと掛菜をむしる音がするが、老人の耳にそんな音の聴取れようはずはない。ばあさんはう

つむいたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいくと小刻みに垣根を傳はつて、隣から隣へと狭苦しい物陰を出たりはいつたりして移つて行くのだ。

みそさゞいと後先になつてほゞじろが来る。冷たい雨のびしよくと降る中を、獨者のほゞじろが灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の郷里で此の鳥の鳴聲を解いて、

一筆啓上仕る。

子供泣かすな、火の用心。

今度の便に金十兩、

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へてゐるのを思ひ出す。

後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもうそろそろづらが來、しぎが來てゐる。(薄田淳介「泣菫文集」ニ據ル)

第六課 伊藤博文

天保十二年九月二日、周防國熊毛郡東荷村の農家に呱呱の聲を擧げたる一男兒は、即ち他日明治の功臣として衆望を一身に集めたる從一位大勳位公爵伊藤博文其人なり。天の將に大任をこの人に降さんとするや、

必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしむ。と。博文家貧なり。幼にして父母に従ひて萩に出て、諸家に雇はれて具に艱苦を嘗む。藩士來原良藏其の資性の穎敏なるを見て、訓育最も力め、勸めて吉田松陰に學ばしめ、後之を木戸孝允にすゝむ。孝允一見其の奇才を愛して、東奔西走國事に勤むるの際、常に博文を伴ひて參畫せしめ



たる所多し。

博文年二十三、海外の事情を審にせんと欲し、井上馨等

と相謀り、萬難を排して密かにイギリスに航せり。此の時長州藩にては、下關海峡を通過せる外國船を砲撃すること數回、各國聯合して其の罪を問はんとす。博文イギリスに在り、新聞を讀みて之を知り、馨と共に倉皇歸國し、直ちに各國公使に懇請して猶豫を求め、藩主に向つて具に攘夷の行ふべからざるを説き、辯論甚だ力む。然れども未だ藩論を一變するに至らざるに、聯合艦隊は下關を砲撃して、長州藩の兵大いに破られ、博文等の慘澹たる苦心も全く水泡に歸せしかば、高杉晉作及び馨等と力を講和に盡くして、能く其の局を結べり。是より後明治維新の大業成るに至るまで、博文は常に長州

藩の爲に列國及び諸藩と應酬折衝の任に當り、隨つて内外の情勢に通ずること益精しく、識見は年と共に高し。

維新の業成るや、博文は二十八歳にして兵庫縣知事に拔擢せられ、次いで明治三年、貨幣制度及び銀行制度取調のためアメリカ合衆國に派遣せられ、翌年また岩倉大使の副使として歐米を巡遊し、歸朝後直ちに參議兼工部卿に任ぜらる。時に年僅かに三十三、累進の速なる多く其の比を見ず。爾來國家樞要の政務にして、殆ど博文の與り知らざるはなく、木戸孝允薨じ、大久保利通兇手に斃れて後は、輿望一身に集り、廟堂の上一日も博文

無かるべからざるに至れり。

斯くて工部卿より内務卿に轉じ、又時に宮内大藏の長官を兼ね、明治十八年官制改革と共に、四十五歳にして内閣總理大臣の重職に就けり。是より先明治十五年、憲法取調の大命を帶びてヨーロッパ各國を歴訪し、歸朝後劇務の傍、帝國憲法及び皇室典範起草の任に當れり。博文其の完全無缺ならんことを期し、日夜精勵、皇國の國體を基本とし、先進諸國の制度を參酌し、遂に千載不磨の法典起草の功ををへたり。此の一勲業を以てするも、博文の名は永く竹帛に垂るゝに足れり。

明治二十七八年戰役の際、博文は内閣總理大臣として

畫策宜しきを得、全權大臣として講和談判の衝に當り、下關條約を締結して帝國の國威を發揚せり。又明治三十七八年戰役に際して獻替盡瘁する所甚だ多く、既にして韓國の統監に任ぜられ、銳意韓國の指導啓發に當る。後日、韓國併合の圓滿に遂行せられしは、博文が用意周到なる施政の功に基づくもの多し。

博文はたゞに政治の樞機に與りて、帝國の發展に偉勳を建てしのみならず、或は宮内卿として、或は帝室制度取調局總裁として、皇室の制度典例を定めたる等、功績擧げて數ふべからず。又政黨を組織して自ら其の總裁となり、我が國政黨政治の發達に盡くすところ少から

ず。

明治四十二年十月、六十九歳の老軀を以て滿洲視察の途に上りしが、二十六日ハルビンに於て兇漢に狙撃せられ、光輝赫々たる一生は其の終を告げぬ。凶報の一たび傳はるや、内外各地よりの弔電雨の如く至り、東西の新聞は筆を揃へて生前の勲功を稱へたり。天皇軫悼あらせられ、國葬の禮を以て葬らしめ給へり。

葬儀に先立ち畏くも勅語を下して、股肱之レ倚り、柱石之レ任じ、忠貞君ニ奉ジテ公正事ニ當り、勲績倍ス顯レテ望ミ一世ニ隆シ。と宣ひしを見ても、如何に御信任の厚かりしかを知るべし。博文久しく顯要の地位にあり

ながら、曾て身後の計を念とせず、國家の重きを以て自ら任じ、盡忠奉公に専らなりしは、誠に後世の龜鑑とするに足れり。

第七課 國寶

我が國には到る處森嚴なる社殿あり。壯麗なる堂塔あり。名匠の手に成れる繪畫彫刻工藝品あり。由緒ある文書典籍の類あり。また一世にあらはれし偉人傑士、後代を導きし學者文人の舊宅の遺存せるあり。是等を觀る時、我等はそゞろに古の美術に魂を奪はれ、或はそのかみの歴史をしのびて、一種無限の感に打たれずんばあらず。

かくの如き建造物及び名寶は其の數頗る多く、之を諸外國に徵するに、其の豊富なること我が國の如きは比類けだし稀なり。これ畢竟我が國體と我が國民性との然らしむる所にして、其の我等國民に與ふる教訓は、實に至大なるものありといふべし。

然れども是等は能く幾多の星霜變故を経て、幸に今日に遺存せるものにして、其の既に壞廢散逸せるものに至りては、舉げて數ふべからず。若し其の保存の法宜しきを得ざらんか、國民の誇たるべき貴重なる遺物も、終には絶滅に至る恐なしとせず。これ國家が是等のものを國寶に指定し、其の保存法を設けて之を保護する所

以なり。

國寶保存法に據れば、建造物・繪畫・彫刻及び工藝品等にして、特に歴史の證徴となり、若しくは美術の模範となるべきものは、國家公共團體の所有たると個人の所有たるとを問はず、ひとしく國寶として指定せらる。國寶はみだりにこれが原形を變更し、或は海外に輸出することを禁ぜられ、其の修理に際しては、必要に應じ國費によりて補助せらる。

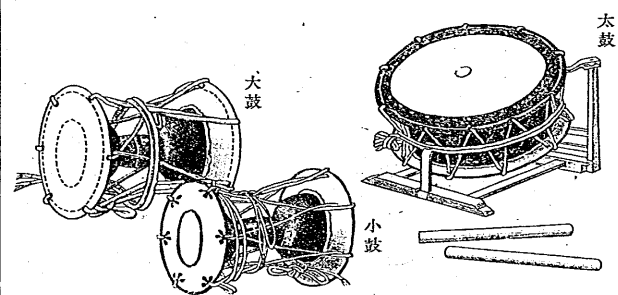
古きをたづねて新しきを知るは、我等の向上に缺くべからざる所。過去の文物を尊重し、これによりて今日の文明の由來を知るは、即ち將來に於ける國運隆昌の基

礎をつくる所以といふべし。されば國寶の保存を圖り、永く過去の文物を傳ふるは、これ實に國家須要の事業たるのみならず、また國民の大いに力を用ふべき所なり。

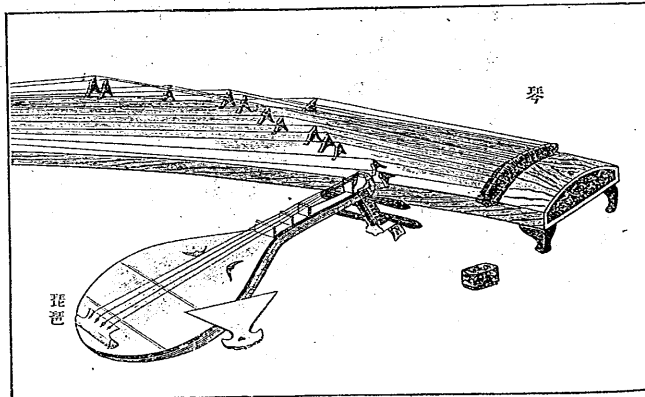
第八課 音樂

聖德太子生駒山に笛を吹き給へば、百獸出でて耳を傾け、妙音院師長熱田の祠前に琵琶を彈ずれば、海魚躍つて陸に上りたりとかや。こはもとより傳説に過ぎざるべけれど、貝・鐘・太鼓高く鳴り渡れば、弱卒も奮ひ起ちて敵陣に向ひけん。ラッパの聲の勇ましきには、傷者も痛手を忘れて突進すべし。母の懷に聽くねんねこ歌より葬

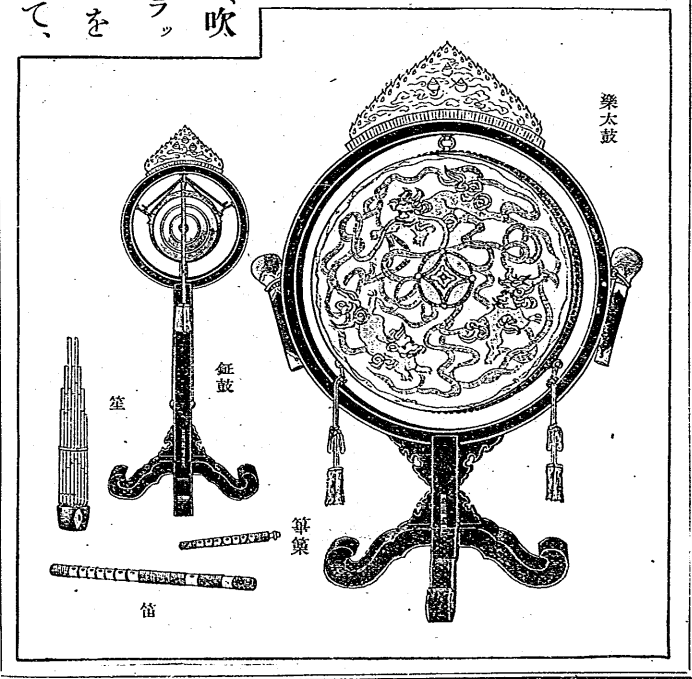
儀の庭の哀悼の曲に至るまで、人生は終始音楽を離るゝことなし。悲痛の曲には人皆身魂の寒きを感じ、和樂の調には聴く者何れも心意ののびやかなるを覺ゆ。音楽の人心に感動を與ふることかばかり大なれば、高雅なる音楽は自ら氣品を高くし、徳教をたすくゝるの効多けれど、其の鄙俗なるものは、風を亂り俗を壞るの恐少しとせず。



音楽を分ちて二とす。人聲を用ふるを聲樂といひ、樂器を用ふるを器樂といふ。然れども此の二つは必ずしも相離るゝものにあらず。琵琶歌に琵琶を唄、瑠璃に琴三味線の類を、諸に笛太鼓鼓の類を、洋樂の歌謠にバイオリン・オルガン・ピアノを始として、諸種の樂器を伴奏するは、人の能く知る所なり。聲樂には獨唱と合唱との別あ

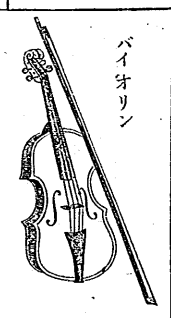
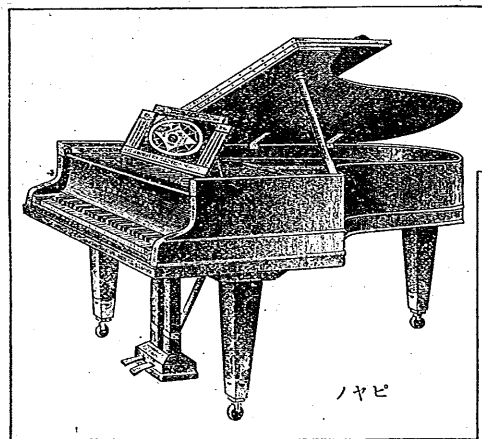


り。器樂も其の用
ふる樂器により
て、絃樂・吹奏樂・管
絃樂の三に分て
り。絃樂は琴・三味
線・バイオリンの
如き絃樂器によ
りて奏するもの、吹
奏樂は笙・簫・簞・笛・ラッ
パの如き管樂器を
用ふるものにして、



管絃樂は絃樂器・管樂器の外に、尙太
鼓又は鉦鼓の如き擊樂器を加へて
合奏するものなれば、最も複雑にし
て且變化に富めり。總べて
樂器は一種にても妙音を
發すべけれど、多種類の合
奏によりて變化と調和と
を聽くを以て興趣最も深
しとす。

邦樂の合奏には二十人以
上の合奏者を見ることが稀



なれども、洋樂の管絃樂にありては、時に數百人の樂手、數十種の樂器を用ひて演奏すること珍しからず。各種の聲音、錯綜連續し、或は高く、或は低く、長きあり、短きあり、和らかなるあり、鋭きあり、滑らかなるあり、しぶりたるあり。時に突如として現るゝ音あり、忽然として消失する音あり。一條の餘音嫋々として絶えざる縷の如き時、滿座の樂器忽ち一齊に響き渡りて、聽衆をして神飛び魂驚くの想あらしむる等、其の變化の妙、諧調の美、筆舌の能く盡くす所にあらず。

邦樂には邦樂の妙處あり、洋樂には洋樂の特色あり。其の何れを勝れりといふべからず。されど音樂の人心に及す影響は極めて大なるものなれば、高尚典雅なる音樂を發達普及せしめ、以て國民の趣味と品位とを向上せしむべきなり。

第九課 東西雜話

吳の國に延陵の季子といふ人があつた。或時主君の命で他國へ使に行く途中、徐の君をたづねた。徐の君がつくづく季子の劔を見て、口にこそ言出さなかつたけれど、如何にもほしさうな様子をした。季子はその心を察したけれども、君命を奉じて使する途であるからと思つて、與へなかつた。使の任を果して歸路に立寄つて見ると、徐の君は既に死んでゐた。季子は大いに悲しみ、彼

の劔を其の墓の側の木に結び附けて歸つた。從者が怪しんで、徐の君は既になくなれたのに、誰に與へられるのか。といふと、自分はさきに心の中で與へようと思ひ定めてゐた。其の人が死んだからとて、初の志を變へるわけにはいかぬ。といった。

引力の法則を發見したイギリスの理學者ニュートンは、學術の研究に熱心な餘り、折々日常の事柄に物忘をするくせがあつた。或日、いつもの通り書齋に立て籠つてゐると、召使が朝食を用意しようと思つて、生卵と鍋を持つて來た。ニュートンは、自分で煮るから、其處へ置いて行け。と命じた。暫くたつて來て見ると、これはしたり、卵

は机の上に残つて、鍋の中では懷中時計がくたくと煮え返つてゐる。

春秋の頃、晏嬰といふ人が齊の國の相となつた。其の御者が馬にむちうち、揚々として得意になつてゐた。御者の妻がそれを見て、夫に、晏子は身のたけ五尺にも足らないが、齊國の相として、諸侯の間に知られてゐる。然も思慮深く、出入にも人に下る様子がある。君は身のたけ六尺以上もありながら、御者となつて得々としてゐるのは、如何にもあさましいことではないか。といった。夫は大いに恥ぢて、其の後行を慎んだので、次第に高官に任用せられたといふ。

ドイツのコンラード王がウェルフ侯を攻めた時の事である。ワインスベルヒの町は久しい包圍に落城の運命に陥つて、明日はいよく開城といふことになつた。其の時城中の婦人から歎願があつて、開城の時には婦人が各自其の背に運ぶものだけは許してもらひたいといふ。其の願は直ちに許された。さて翌朝城門から續々出て来る婦人を見ると、皆其の夫や親兄弟などを背負つてゐる。城主も亦其の夫人に背負はれて列の中に居た。寄手の軍勢は是はけしからぬと怒つたが、王は笑つて、王者に二言は無い。許せ。といつた。

後漢の鮑宣の妻は、字を少君といつた。宣は少君の父に

就いて學んだが、少君の父は宣の清貧に安んじて勉學するのを感じ、遂に娘を宣に嫁せしめた。少君の家はもとと富貴であつたから、持參の衣類道具總べて善美を極めた。宣はそれを見て、御身は富貴の家に生まれて美衣美食に慣れてゐる。それに反し我は貧賤であるから、如何にも釣合はない。といつた。すると少君は、父は君の志に感じて私を嫁せしめたのである。既に一旦嫁した以上は、何で夫の心に背きませう。と、其の日から侍女を返し、美衣を脱ぎ、短い布子を着て、小車を引きながら、宣と共に郷里に行つて宣の母に會つた。これより薪水の業を自らして、婦道を行ふこと誠に固かつたから、感

ぜぬ者はなかつた。

フレデリック大王はプロシヤ近代の名君といはれた人である。軍隊を檢閲する毎に、何時も兵士に向つて三箇條の問を出した。第一、年は幾つか。第二、服役以來何年か。第三、俸給も用品の給與も十分か。の三問である。或時フランス生まれの新募の兵が、不日檢閲があるが、ドイツ語がわからぬと當惑してゐると、一人の同僚が、王の問は斯くくゝの順序であるから、斯くくゝ答へよ。と教へてくれた。其の日になつて、王は第一に問うた。

王、服役以來何年か。

兵士、二十一年。

王は驚いて、

王、年は幾つか。

兵士、三箇月。

王は愈驚いて、

王、汝の言ふことは更にわからぬ。朕と汝とどちらかが狂つてはをらぬか。

兵士、兩方とも。

第十課 乾物屋

さかな屋は其の日くゝの天氣都合によつて店の魚類を異にし、八百屋は四季によつてそれくゝの蔬菜を並べてゐる。唯一年中店先の賣物に變化の無いのは乾物

屋であらう。

五穀の中、米を除いた麦・豆・粟・黍は大抵乾物屋で商ふ。豆には大豆・小豆・えんどう・そらまめ・いんげん等があつて、或は煮、或はいつて食ひ、又は菓子材料とする。大豆からは味噌・醤油・納豆を作り、豆腐・湯葉を作るなど、其の利用が非常に廣い。小豆は主として餡を製するに用ひ、又飯にまじへたいて赤飯とし、祝事に用ひる。大豆は殊に北海道に多く産するが、滿洲地方から輸入して來るものもある。

湯葉は水に浸した大豆を碾臼で碎き、それを煮て製するもので、煮る時表面に生ずる薄い膜をすくひ取り、之

を日又は炭火で乾かすのである。愛知・香川・秋田等の諸縣から産する。

高野豆腐といふのは、豆腐を小形に切つてゆで、寒中屋外に夜ざらしにして凍らせた後、乾かしたものである。もと紀伊の高野山で製したところから此の名がある。又菰蕪を略同じ製法で製したものを、氷菰蕪といふ。粉類には、豆の粉・麥粉・蕎麥粉等がある。小麥粉はうどん粉ともメリケン粉ともいつて、さうめん・うどん・パン菓子などを製し、蕎麥粉では蕎麥を製するのは誰も知つてゐる。此の外、小麥粉から製したものに麩がある。麩には生麩と乾麩があるが、乾物屋にあるのは乾麩である。

京阪地方から出るのが良いといはれてゐる。

干大根には、全干割干切干等がある。切干では岐阜縣産の美濃干が最も名高い。愛知縣産の割干大根には、長と一丈五六尺に達するものがある。

干瓢は栃木縣の産を最上とする。まだ十分熟さない夕顔をとつて、其の外皮をはぎ棄て、果肉だけを薄片として日光に乾かしたものである。

椎茸は精進料理に味を附けるのに缺くべからざるものである。元來椎櫟櫟等の朽木に自生するものであるけれども、今は人工で盛に繁殖させる。伊豆の天城や紀伊の高野などからよい品が出る。支那人は非常に之を

好むので、近年彼の國へ輸出する額が頗る多い。

其の他香味料として、胡麻、麻の實、芥子などがある。又水産物では、淺草海苔、青海苔、昆布、和布の類、又鰯、鯉節のやうな貯藏に堪へる食料品は、大抵乾物屋で求めることが出来る。

第十一課 歸宅の日取を申し送る

細々の御手紙嬉しく拜見致候御一同御變りなく次郎は大元氣の由何より安心致候私突然の留守とて皆様御困りなされ候事なるべく殊にお前様の御心遣御察し申上候あと數日のところなれば宜しく御願ひ致候御申越

によれば北海道の鈴木様御夫婦にて御歸郷の由十年以上も御目にかゝらぬ上お冬さんとは幼馴染の事とて私も是非久々にて御話も致したしと存候幸ひ御祖父様の御病氣も其の後御經過非常に宜しく今日のお前様の御手紙なども手にとりて御覽なされし程に候また主治醫の話にてももはや心配はなかるべしとのことに候へばあと一兩日御様子を見候上二十日頃には出發致したく存じ居り候就いては遅くも二十三日までには歸宅致候旨鈴木様まで御通知置きの程願上候末

ながら父上様へも宜しく申上げ下されたく候取急ぎかしこ

年 月 日

母より

とし子様

第十二課 税所敦子

税所敦子は京都の人文政八年を以て賀茂川の東錦織の里に生まる。幼き時より學問を好みて、歌文の道にすぐれたり。齡二十にして、其の頃京都にありし薩摩藩士税所篤之の後妻となりて琴瑟相和せり。二十八歳の時、不幸にして夫に先立たれしかば、嬰兒を懷にして夫の故郷なる鹿兒島として下りぬ。其處には姑のありしか

ば、それに仕へて孝養を盡くさんとなり。

當時鹿兒島の俗、同郷人の外はよそ者と稱して賤しむこと甚だしく、其の姑の如きも、京女の來りて同居する



を快しとせざりき。されど敦子は能く先妻の子を愛し、又粗衣をまとひて立働き、手づから姑の好める物を調理してすゝむるなど、孝養怠りなかりしかば、曾ては同居するをだに厭ひたりし姑も、いくばくならずして敦子を杖柱とも頼むに至れり。

藩主島津齊彬之を聞きて、其の孝貞に感じ、用ひて世子保育の任に當らしめ、親しく其の爲す所を見て、我、人を得たり。と喜びたり。敦子亦深く其の知遇に感じ、日夜心を盡くして仕へしに、世子は病みて天死せり。敦子悲歎に堪へず、自及して之に殉せんとせしが、姑の取りすがりて、我今御身を失はば、何を樂しみに生き長らふべき。と泣悲しめば、また思ひかへして、愈、奉養の道を盡くしぬ。後齊彬の弟久光の女、近衛忠房に嫁ぐに際し、敦子再び選ばれ、老女となりて東上せしが、召使の者を遇するにも、慈悲懇切を極めたりといふ。

明治八年、宮中女子の人材を召し給ふに當り、ぬきんで

られて權掌侍となれり。爾來常に宮中に在りて、御製御歌の拜寫を承り、或は同僚の女官の爲に百事の質疑に應ずるなど、日夜安息の暇とてはなかりき。もと盧弱の質なりしが、公事に服じては攝養に意を用ふるの暇もあらざりしかば、一年大いに病むことありき。天皇之を憐み給ひ、家居して適意に出仕せしめんとし、人もて内旨を傳へしめ給ふ。敦子安んずる能はず、平素厭ひし牛乳をさへ飲みて療養に力め、癒ゆるに及びて、奉仕することものと如くなりきといふ。

明治三十三年二月病みて卒す。享年七十六。病篤きに及び、特に掌侍に任じ、正五位に陞叙せらる。家集を御垣の

下草といふ。秀歌頗る多し。

たまものの錦着つゝも思ふかな

ときあらひ衣ぬひしむかしを

苔の上にぬれし椿の花落ちて

はるかぜさむし谷の下道

第十三課 雪

夏蟲氷を知らず。といふ語もあるが、熱い國の人は雪の美觀を知らない。空が薄墨色に曇つて、底冷がすると思ふ中、何時か篩でふるつたやうな細かな白い片々が落始める。見る中に天地一白、葉一つも無い冬木立も、常磐木の林も、綿をかけたやうに眞白になり、金殿玉樓も茅

屋も差別なく同一の色に埋められる。路上の泥も隠れて、人の足跡、車のわだちが残るかと思へば、又忽ちに降埋められる。路行く人は鶴の羽衣を着て往來すると、昔の詩人は見立てた。花の美は地上の一部分に止るが、雪の美は天地を一つに包んだ壯觀である。多くの草花の枯果てた時節、自然は又此の壯觀を與へて、我等の心目を一新するのであらう。

雪の景色は、水邊山間何處としておもしろくない處はない。

雪の江の大舟よりは小舟かな

芳川

は水上の風光

山の雪夜は家ある火影かな
は山中の夜景。

奇淵

長々と川一筋や雪の原

凡兆

見渡す限り野山は雪になつて、川ばかりを埋め残した景色である。

旅人の外は通らず雪の朝

去來

松原に飛脚小さし雪の暮

一品

に街道往還のとだえがちな寂しさを思へば、

箱根越す人もあるらし今朝の雪

芭蕉

旅人に我が糧分つ深雪かな

兀董

に雪中の山路の困難は一層思ひやられる。

狼の聲揃ふなり雪の暮

丈草

荒熊のかけ散らしてや笹の雪

北枝

深山の荒涼たる景色、身にしむ心地がする。

戸にさはる音も静けし夜の雪

如洋

雪折れも聞えて暗き夜なるかな

蕪村

といふやうに、夜中降通して降積つた幾尺の雪、朝の眺の美しさよ。

静かさや雪のあしたの金閣寺

灌園

何時か朝日が輝き渡つて、

雪はれて空さりげなき朝日かな

鯨山

美しき日和になりぬ雪の上

太祇

第十四課 賢母の教

一

雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越、それはやよひの春の頃、櫻狩して行く道の眺もあかぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚をつんざく。辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、満目蕭條たる湖上の風景、唐崎の松は暮靄の中に隠れて見え、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の峯、今より山路にかゝらば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿りを求めんかと、

獨旅の少年は、前路をにらんで暫く湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此處に留らん、夜にてもあれ朝にてもあれ、家に歸るを得ば疲も厭はじ、いでく今宵の中に此の山を越えんものと、心を取直し、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそはかゝりけれ。

いたはしや藤太郎、母に會ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を杖にすがりて唯一人、たどりくゝて行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出て、道の邊の雪を紅に染めながら、尙も心を勵まして、風雪の

中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、いや増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。寂寞たる満山、耳に聞ゆるものとは、閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪こずゑを壓して、枝折れ雪の落つる響など、微かにものすごく聞えて、恐しとも悲しともたとへんやうなし。斯かる難所と知りもせば、麓にて一夜を明かししものを、旅馴れぬ身の悲しさに、足に任せて此の深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出られず後へも戻られず。

藤太郎は進退きはまりて、半ば死せるものの如く、松の

根方に打倒れたり。其のまゝ起きも上り得ず、降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、次第に飢を感じて、寒さは一入身にしみ渡り、何時しか眠るともなく、死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

やゝありて、耳許に人の呼ぶ聲、微かに眼を開けば、身は辻堂の縁に在り。我を呼びしは年老いたる一人の僧なりけり。僧の傍には小牛の如き黒犬一頭、おとなしくひかへをり、縁の前にはたき火の灰僅かに残れり。あはれ藤太郎は、危くも凍死すべかりしを、幸に此の犬に搜し出され、此の老僧の情にて漸く助けられたりしなり。

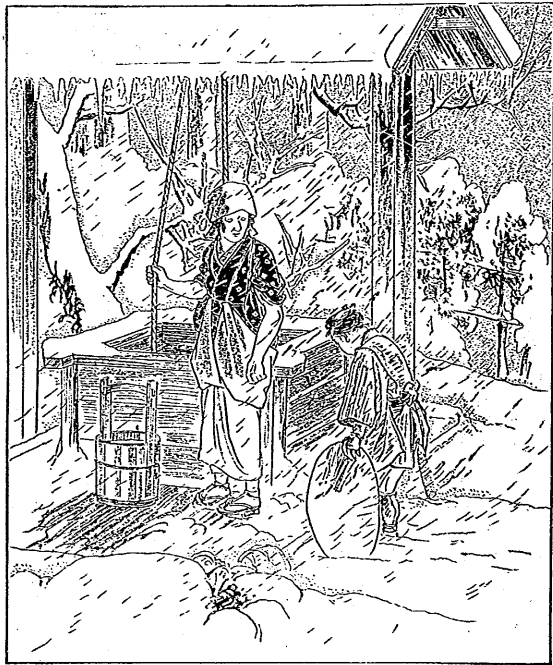
二

懐かしの故郷や、藤太郎は昔覚えし山川草木を目の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、道を急ぎて我が家の方に向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪空の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。彼の家は我が友の家なりけり。此の家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を思ひ出で、そゞろに哀を催しつゝ、暫くにして我が家の前に來れり。

見れば門は舊によりて立ちたれども、半ば雨に朽ちて柱も傾き、土塀も崩れたるところあり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。竹の一叢思ふまゝに根を延ししと見え、彼方此方に生ひ茂りて、雪に堪へざる風情あり。

玄關の戸は未だ開かず。母君は未だ起き給はぬにやあらんと、屋敷の内に入りて勝手の方を見れば、車井戸のきしる音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母なる人、藤太郎は忽ち胸ふさがりぬ。昔は數多の男女を使ひて、勝手などに出られしことなき母君が、此の雪の朝の寒空に、自ら水を汲み給ふか、情なしと湧出づる涙止め敢へず、急ぎ井戸の側に驅行きて、後より其の袂を引き、あゝ母様私が汲ませう。と涙ながらに取りすがる、事の意外なるに、母は驚きて振返り、誰か。おや、藤太郎。どうして此處へは、はい、母様のお手助を致しに参りました。お話は後で申し上げますから、先づ内へおは

いり下さりませ。あゝ、おつむりへ雪が。と、孝子の眞情片時も母を此の雪中に立たしむるに忍びず、母は車井戸の綱をしかと握りて石の如く立ちたるまゝ、御祖父様とでも御一しよか、いえ、唯獨で、母は聲を勵まし、御祖父様が獨そなたをお出しなされたか、いえ、



濟まない事とは思ひながら、御祖父様には知らせずに参りました。えつ、なぜそんな事を。——さつと吹來る朝嵐に、地上の雪はくるくると卷揚げられて、横に二人の顔を打つ。

藤太郎は母を思ふ一心に遙々歸り來りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根にそゝろに涙にむせびしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして、そなたは此の母の言葉を忘れましたか。そなたを御祖父様にお頼した時、一旦國を出たからは、りつばな人にならな
い中は、決して中途で歸るなど、あれ程堅く言聞かせたではないか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯そなたをりつ

ばな者にしたいばかり。りつばな者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び會ひませぬ。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。餘りの事に藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けして雪の上にひざまづきぬ。母は其の失望せる様子を見て、いたはしさ胸に滿ち、斯くまで我が身を思うて來りしものを、——百里の道の獨旅、定めて憂き事もつらき事も多かりしならん、——せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めませんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしてまた、思ひ直し、なまなかに

弱き心を見せなば修業の邪魔獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。そなたは母の言ふ事がわかりませぬか。と強くは叱れど、聲はうるみぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、はい、わかりました。それならば、今から歸りますか。藤太郎は悲しき聲、はい、歸ります。とすなほに言ふ。母はすなほに答へられては、尙更腸の絞らるゝ思。遂に堪へかねて忍び泣き、袖かみしめて聲をのむ。

藤太郎はきつとして立上れり。母様、此の薬はあかぎれの妙薬で、世にも得難い品、差上げたいと思つて、わざわざ持つて参りました。これだけはお取りなされて、下さ

りませ。と差出す。母は快く、お、そなたの志、これだけは受けませう。と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顔、互の目には涙一ぱい。

母は恥づかしと、じつとこらふる心の苦しき。子は堪へざりけん、薬を手より取落してうつむけば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲みおきし水を見れば、何時の間に張りけん、上は一面の薄氷。藤太郎は遂に心を勵まして、泣くゝ我が家を立出てたり。見送る母、見返る子、満天の風雪路悠々。(村井寛、近江聖人ニ據ル)

第十五課 詠史十首

上毛野形名の妻

長澤伴雄

を、しくもたわやがひなに弓とりて

鳴らす弦の音たかくもあるかな

源義家

橘曙覧

年を経し絲のみだれも君が手に

よりてをさめし東の國

平重盛

伊能穎則

身を捨てて親を諫めし言の葉の

露にぬれざる袖やなからん

源頼政

小出繁

時鳥雲居に鳴きし夢さめて

扇の芝にあきかぜぞ吹く

青砥藤綱

小野務

滑川水底照らす松の火に

深き心の見えもするかな

北條時宗

渡忠秋

神風のもろこし船を拂ふまで

つくしにけりな武夫の道

楠木正成

野矢常方

君が爲散れと教へておのれまづ

あらしにむかふ櫻井の里

新田義貞

足代弘訓

歸り來ぬ越路の雁ぞあはれなる

吉野の春のはなも見ずして

上杉謙信

高崎正風

贈りけん鹽の色にも見ゆるかな

越路の雪のきよきこゝろは

徳川光圀

内藤存守

湊川清きながれも西山の

月の光にすみまさりつゝ

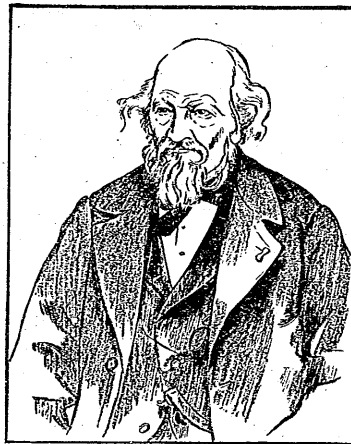
第十六課 ボアソナード君の歸國を送る詞

一日朝早く、余はボアソナード君を永田町の家に訪ひたりしに、君は例の如く文机によりて、餘念なく法條を

起草しをられたるが、其の顔色疲れて常ならず覺えければ、病やある。と問ひしに、病は斯くなん。とて、其の脚を示されたり。見れば二つの脚共に水色になりてはれ太りたり。余は、何故に靜かに養生し給はざるか。と問へば、司法大臣と約束ありて、某の日までに若干箇條を起草し終へざるべからず。此の義務は病によりて背く能はず。と答へられたり。余且は驚き且はおぼつかなく思ひて、急ぎ山田司法大臣の邸に至り、此の由を告げけるに、司法大臣も共に驚かれ、即ち祕書官栗塚君を遣り、君を訪問せしめて、速に轉地療養あらんことを勧められけり。君は約束當事者の命を受けて、始めて心おきなく田

舎に轉養せられたり。

余は此の時家に歸りて、密かに歎息して思へらく、凡そ司ある人々にして、斯くまでに深き義務心に伴なへる勉強を以ていそしみたらんには、立法事業並びに諸般の事の擧らざることやあるべき。と此の事一小件なれども、余は將來ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ずるがために、別に臨みて之を公衆の前に述ぶ。君の二十年間の立法上の功績の如きは、他



の諸君の演述に譲りてこゝに多言せず。

余は實にボアソナード君と二十年來の友なり。場合に
よりては我が師なり。さるを病を以て錢の席に臨むこ
と能はざるは、これぞ遺憾の極みなる。今書して君の旅
行の安全を祝し、併せて左の詞を以て君を餞す。

余は、君が曾て我が國を呼びて第二の本國といへりし
ことを記憶す。余輩は將來に遠く君を海のあなたに慕
ひ望むと同時に、君も亦長く第二の本國を忘れざるこ
とを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が立法上
及び諸般の事業に於て如何に發達するかを見て、幸に
余輩の爲に必要なる注意と勸告とを怠ることなかれ。

〔井上毅「梧陰存稿」ニ據ル〕

第十七課 我が國の家庭

我が國の家々には、古來皇祖天照大神^{アマテラス}を奉祀し、又先祖代々の靈を祀る。これ實に其の祖を尊び、其の本を忘れざるの國風に基づく。

祖先の祭祀には最も心を用ひ、日々炊ぐ飯も、不時の到來物も、先づ之を祖先に供ふるにあらざれば食はず。年祭、年忌は懇に之を修め、親類縁者を招きて、追遠の志を深うす。

西洋にては、若夫婦は父母と同居するもの稀なれども、我が國にては、一家の内に同居するを普通とす。斯くて

父母に仕へ、弟妹を導き、能く其の家風を繼ぐを貴ぶ。祖父母が家に在りて孫を愛撫するを得るも、夫婦の其の子を老父母に託して力を家業に専らにするを得るも、皆これ同居の賜物なるべし。

家族間に於て長幼の序を重んずることは、言葉遣の上にも現る。親の子に對する、子の親に對する、兄姉の弟妹に對する、弟妹の兄姉に對する、親しきが中にも目上目下の別自ら明らかなり。

主人の座席と定めたる處は、主人家に在らざる時も其のまゝにあけ置きて、何人も坐することなきが如き、旅行中の家人に對しても、食事毎に陰膳をすうるが如き、

家長を尊び家族相思ふの深きを見るべし。
客に接するも、他を訪問するも、主人主として之に當り、主婦は専ら家事に注意して、概して表向の事に關係せず。裁縫洗濯の如きは、普通の家にては之を人手に渡すことなし。家によりては、味噌醬油の製造、梅干澤庵を始め四季折々の漬物、土用中の蟲干等、主婦の爲すべき事も頗る多し。

第十八課 道德と法律

法律を遵奉するといふことは、國民の重大な義務であつて、法律の命ずる所は道德も亦之を命じ、法律の禁ずる所は道德も亦之を禁ずるのは、いふまでもないこと

である。しかし法律は唯國民利福を増進し、社會公共の安寧秩序を保持するがために、國家が權力を以て定め、たものであつて、道德に比べると、其の範圍は遙かに狭い。

餘財の有る者が、公共の爲に應分の義捐をするといふやうな事は、法律が命ずる事ではないが、道德は善事として之を獎勵する。集會訪問等に約束の時刻を違へるやうなことは、道德上からいへば、非難すべき事であるが、法律は禁じない。是等は唯其の一例に過ぎないけれども、我々の日常の行爲は、法律の支配によるものよりも、道德心の發動によるものの方が多し。されば唯法律

の命ずる所を行ひ、法律の禁ずる所を行はないだけでよいといふことの出来ないのは明らかである。

債権者に對して、債務者が約束の期限になつて其の債務を果さない場合には、法律は、之を法廷に訴へ、財産差押の處分を請求する權利を與へてゐる。けれども道德上からいへば、少しも債務者の事情を察せず、法律の與へた權利だからといつて、むやみに之を行使するやうなことは、人情にもとるものとして、甚だしく擯斥せられるであらう。さればたとひ法律は許しても、道德は必ずしも之を許さないことがある。法律上有する權利はあくまで之を主張し、他人の自分に對する義務はあく

まで之を強要して、道德に背かないものと思ふならば、それは非常な誤である。さればとて、其の權利に對する義務を有するものは、固より之を果さなければならぬ。之を怠るのは道德も許す所でない。道德は必ずしも法律の與へた權利の行使を許さないが、法律の命じた義務は必ず之を果すことを命ずるものと思はなければならぬ。

之を要するに、法律の命ずる所は必ず之を行はなければならず、法律の禁ずる所は決して之を行つてはならぬ。法律の禁じない事でも、之を行ふべきや否やは、更に道德上の考量を要する。又法律は人間の爲すべき行爲

の一部を示すものに過ぎないから、人間の爲すべき事は、法律の規定せる以外に多々あることを知らなければならぬ。

第十九課 田園の自然

六つになる親類の子供が、去年の暮から東京へ來てゐる。これに、東京と國とどつちが好いか。と聞いてみたら、「お國の方が好い。」と答へた。どうしてか。と聞くと、お國の川には鰻が居るから。といった。

此の子供の「鰻」といつたのは、必ずしも動物の「鰻」のことではない。「鰻」の居る清冽な小川の流、それに緑の影を浸す森や山、河畔に咲亂れる草花、さういふやうなもの全

體をひつくるめた田舎の自然を象徵する「鰻」でなければならぬ。東京でさかな屋から川鰻を買つて來て此の子供にやつてみると、此の事は容易に證明されるであらう。

私自身も、此の「鰻」の事を考へると田舎が戀しくなる。しかしそれは現在の田舎ではなくて、過去の思出の中にある田舎である。鰻は今でも居るが、子供の私はもう其處には居ないからである。しかし此の子供の私は、今でも大人の私の中の何處かに隠れてゐる。さうして意外な時に出て來て外界をのぞくことがある。例へば郊外を歩いてゐて、道端の名もない草の花を見る時や、或は

遠くの杉の森の神秘的な色彩を見てゐる時に、唯瞬間だけではあるが、此の鰻の幻影を認めることが出来る。それが消えたあとに残るものは、淡い時の悲しみである。(寺田寅彦「冬彦集」二據ル)

第二十課 我が家

自ら世を避けて門を鎖すとはあらねど、片田舎に住めば、來り訪ふ者自ら稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪前に葡萄、棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、いちじゆくや、さるすべりや、其の間に簇生す。四顧唯木立を見て人家を見ず。何となく我が心に適する

處なり。

我年來病軀を抱けり。我が志を伸さんには、先づ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず、たゞに我が心に適するのみならず、又我が體に適す。汽車の便をかりて都門より歸り來れば、満園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛來りて我が手のふろしき包に取りすがる。例として土産の菓子あらんことを期するなり。

蒸暑き夏の夕、涼臺をいちじゆくの下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉をよぎて涼氣自ら盤上にほどばしる。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の鶏と分ち、池の

鯉と分つなり。今一つ、一匹の犬、何時も食時を違へず來りて畏まる。これ近隣の家の飼へるものなり。其の主人、近頃妻子を残して病死せり。喪家の犬のたとへ思ひ出されて哀なるまゝに、残肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨魚なきこと多し。じやがいもなど與ふるに、唯鼻先にかぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

池あり、水二間四方に足らざるばかりなれど、清水湧きて流れ出でて田に注ぐ。もとは朽木中に満ちて、蛙やゐもりのすみかとなり、岸には雜草生ひ茂りて見る影も、なかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、ゐもりを捕らふ

ること七八十に及び、水始めて澄みて、顔も寫るべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙ゐもりのみと思ひの外、長さ一尺ばかりの眞鯉ありておよぎめぐり、人の足音聞きて穴深く潜み行く。大兒と中兒と之を見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黒や、碧^{あざ}水に一種の模様をゑがき、或は集り、或は散じ、時には水面に浮かび、時には空に躍る。形ばかりの欄干ある丸木橋に立ちて、之を眺め、之に餌をやること、三兒にとりては此の上もなき慰なり。

おぼつかなげに、とゝとゝと呼びて、鶏に餌を與ふるこ

とも、亦兒等が慰の一つなり。家の四方に散在せる鶏此の聲を聞きて喜んで來り集り、先を爭うて食ふ。雄三羽、雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。中にもしやもの雌一羽、最も慄悍なり。餌を食ること最も甚だしく、近寄るものの頭を嘴にてつくさま、如何にも憎らしく、他の鶏恐れて敢へて近寄らず。されど最も大にして好き卵を産むものは此のしやもなり。

園中兒等を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、いちじくなり、竹の子なり、鶏なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。喜ぶ兒等を見れば、我は唯嬉しきなり。此の時、慾もなし、名利の念もなし。默坐して自然に對す

れば、初は其の愛すべきを覺え、終には其の敬すべきを覺ゆ。尙久しく對すれば、其の奥に不可思議なる何物かの潜めるが如く思はる。而して小兒は人類の中にて最も自然に近きものなり、よしや子を持つて、未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しき我が團欒にも、尙一抹の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むことも前後僅々十餘年に過ぎず。末年我と相住みて小安を得たるは、猶一年中の小春日和の如きか。然るに我が病弱の身は、其の小春日和をさへ、時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身な

るを氣遣ひ、我が食少きを心配す。親思ふ心にまさる親
心と詠じけん、世に子の病ばかり親の心をいたましむ
るものなし。罪深きかな、抑不孝の子なるかな。昔は廉頗
老いて尙用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。そ
れは功名故、我は親故に、強ひて餐を加へ、久しく絶ちを
りし晝食さへものするに至りぬ。食進むやうになりて
嬉しとて、母の喜ぶ様見るにつけても、覺えず涙ぐまれ
しこと幾度ぞや。天町芳衡桂月全集ニ據ル

第二十一課 春を待つ歌

北風のすさぶがまゝに

野も山もうらさびたれど、

草木や、芽はふくらみて、

あたゝかき光を待てり。

ひねもすに口をつぐみて

鶯は谷にこもれど、

笹かげに空をうかひ、

巢を出づるかまへやすらん。

沖邊ゆく白帆も稀に、

波の花岸に凍れど、

立ち並ぶ筈に青みて、

海苔の香の高きが附けり。

やがて見よ、月はおぼろに、

島影は夢かと浮かび、

春の海静けきゆふべ、

櫻鯛躍らん近し。

斯くて今、春は隣れり。

雪分けて若菜も摘まん、

遠近の梅も尋ねん。

楽しきは春待つ心地。

第二十二課 世界の航路

始めて蒸氣力を用ひて大西洋を横ぎつた船は、僅か三四百トンの大きさのもので、早さも六七節に過ぎなかつたが、其の後だんく發達して、現今では實に八萬トン以上のものもあり、其の早さも増大して、平均一時間三十一節を超えるものさへあるやうになつた。随つて大西洋を横ぎるに、最初は二十數日を費したのが、次第に減じて、十五日となり、十日となり、八日となり、今では四日以内に短縮した。斯く其の早さが増したのみならず、其の設備の上にも、非常な進歩を來して、完備した客船では、船室の設備が陸上のホテルと變るところがな

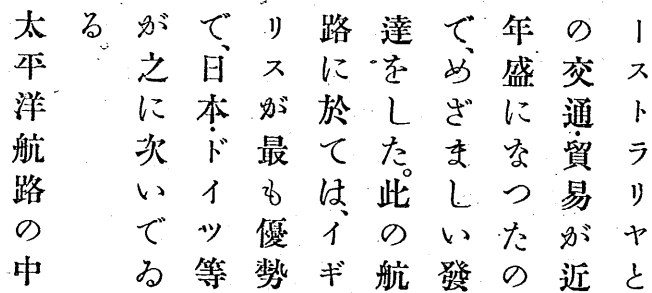
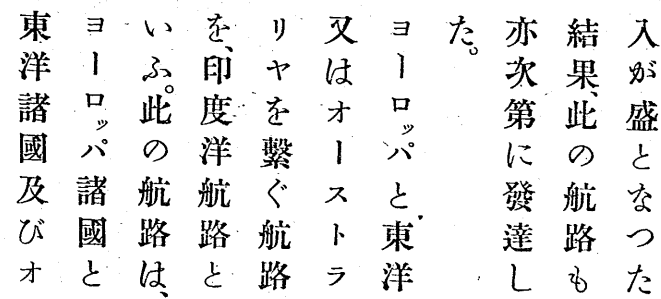
く、其の上無線電信によつて海陸通信の連絡を圖り、船中で新聞を發行して、日々の出來事を報道するまでに進んでゐる。

航路の延長は、貿易の發展や國防の強化に非常な關係のあるものであるから、各國は競つて自國商船の航行を獎勵してゐる。

現今航路の最も發達してゐるのは、歐米二大洲の間にある大西洋で、世界の海運國を以て任ずる諸國は、劇しい競争をこゝに演じてゐる。しかし近時我が國を始め、太平洋沿岸諸國の著しく發達したこと、又パナマ運河が開通して、大西・太平兩洋の連絡がついたことなどの

ために、太平洋にも劇しい航路競争が起り、今日では其の航路も非常な發達をした。今左に世界の航路中主要なものに就いて述べることにする。

大西洋の航路の中、北大西洋航路は、ヨーロッパ諸國、殊にイギリス・フランス・オランダ・ドイツ・ベルギー・イタリア等の主要港灣と、アメリカ合衆國・カナダ等の主要港灣との間を往來するもので、世界船舶の二分の一は此處に集り、前に述べた最新式の大船巨舶は、實に此の航路に用ひられてゐるのである。此の外、尙大西洋には、ヨーロッパと南アメリカを繋ぐ南大西洋航路がある。近年南アメリカの開發が俄に進んで、移民の招致、物資の輸出



主要なものは太平洋横斷航路で、南方航路と北方航路の二つに分れてゐる。此の航路に使用せられてゐる船舶は、北大西洋航路のものに比すると遜色はあるが、しかし中には船體も頗る大きく、早さも亦能く平均一時間二十節を超え、優秀な設備を有してゐるものも少ない。此の航路に於て最も優勢なのは我が國で、アメリカ合衆國及びイギリスが之に次いでゐる。

我が國も明治以來大いに意を海運の發達に注ぎ、遠洋及び近海に多くの航路を設けた。現在遠洋航路の主なものとしては、歐洲航路・北米航路・南米航路・濠洲航路等がある。歐洲航路は、ロンドン線・ハンブルグ線・リバプー

ル線其の他多くの航路に分れてゐる。北米航路には、サンフランシスコに行く航路、シヤトルに行く航路の外に、パナマ運河を通つてニューヨークに行く航路もある。南米航路はペルー及びチリに行く西岸線と、ブラジル及びアルゼンチンに行く東岸線とに分れてゐる。濠洲航路は、香港・マニラ等を経て、濠洲諸港に至るものである。

イギリスは世界汽船總トン數の約三割を所有し、世界の諸港中イギリスの國旗のひるがへらない處はないと誇つてゐる。之に次ぐものはアメリカ合衆國で、第三位は即ち我が國であるが、近年に至り我が國海運の發

展は益、著しいものがある。

第二十三課 手紙の認め方

手紙を認めるのは人と應對すると同じことで、先方の如何によつて、程々の言葉遣に注意せねばならぬ。尊貴の人に對して粗略な言葉を遣へば、失禮になることは言ふまでもなく、親密な間柄の人に餘り丁寧な文句を用ひれば、却つて他人行儀になつておもしろくない。手紙は又其の目的や場合の異なるに隨つて、精粗繁簡の趣を異にする必要がある。精密な説明を要する時には、長きを厭はず委曲を盡くして書くべく、父母に近況を知らせたり、友人の不幸を慰めたりするための手紙

は格別として、普通の手紙はなるべく簡潔を旨とするがよい。殊に急を要するものには出来るだけ贅言ぜいごんを挿まぬやうにせねばならぬ。多忙な人にくだくしい手紙を出すのは自分の徒勞はまだしも、先方の人に對して迷惑をかける所以である。人によると、餘り短いのは何となく手紙の體裁を具へぬやうに思ふが、手紙は用事さへ通ずれば、短くともよいのである。本多作左が陣中から、一筆啓上。火の用心。おせん泣かすな。馬肥せ。といふ手紙を留守宅へ送つたといふ話がある。これでも用事は十分に足りたのである。

慶弔や慰問の手紙は、自分の身を其の人の境遇に置い

て、十分の同情を以て書かねばならぬ。儀式一片で誠意の籠つてゐない文は、詞は如何にりつばに書連ねてあつても、喜を共にし悲しみを分つの心を先方に達することがむづかしい。

對話の場合には、不明の點があれば直ちに聞返すことも出来るが、手紙の上ではそれが出来ないから、明瞭に書いて、誤解の起らぬやうにするのが最も緊要である。年月日や氏名を省略したために間違を起したり、又文句の不備から先方の感情を害したりすることも珍しくない。

手紙の返事はなるべく速に出すがよい。之を等閑に附

するときは、其の挨拶も書添へねばならず、益書きづらくなるものである。手紙の返事を忘れたり後らせたりするのは、交際の道にも背くことになる。

手紙を認めるのは決してむづかしいことではない。人と對話するのと同じ心持で書けばよいのである。

第二十四課 畫師の苦心

昔、泉州堺さかいのなにかし寺に、或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、

「君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度

も筆を取り給ひし事なし。我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滞在せんもはかり難し。」

といへば、畫師

「そはいと名残をしき事なり。さらば謝恩の爲に何か畫がきて參らすべし。」

とて、心構せしやうなりしが、尙筆も取らで數日を過しぬ。

或夜小僧、住持の居間に來りて、

「彼處に行きて、彼の畫師のする様を見給へ。」

とさゝやきければ、住持ひそかに行きて見るに、畫師は障子に身を寄せて、様々に姿を變へつゝ、寢起する様なり。さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ、寢間に入れり。

翌朝畫師は常にもあらず早く起出で、ふすまに向ひてしきりに筆を動かしたるなり。其の畫がく所皆鶴にして筆勢非凡、丹青の妙言ふべからず。かくて次の夜は如何にとりかゝふに、畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかなどひとり言してゐたりければ、住持は尙知らぬ顔して過ししに、十日餘りにして、ふ

すまの鶴は二十四五羽となりぬ。其の後又夜更けて、うかひ見れば、今度はひぢを張り、足をのべ、手を口に當てて鶴の臥したる様をなせり。夜明けて住持、畫師に向ひて、

「今日かき給はん鶴の姿はかやうなるべし。」

と、夜中に畫師のしたる様をまねて見するに、畫師驚きて、

「我が心に思ひ構へし事を如何にして知り給へるか。」と問ふ。住持

「昨夜のぞき見て知りたり。」

此の一言を聞くや、畫師又かのふすまの鶴に筆を取ら

ず、唯杉戸に檜一本を畫がきて東國へ出立しぬ。

未だ一月もたゞざるに、かの畫師は突然歸り來れり。住持驚きて、

「東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。」

と問へば、畫師

「先に畫がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。」

とて一枝かき添へ、又別れを告げて立去れりといふ。

第二十五課 ローマの舊都

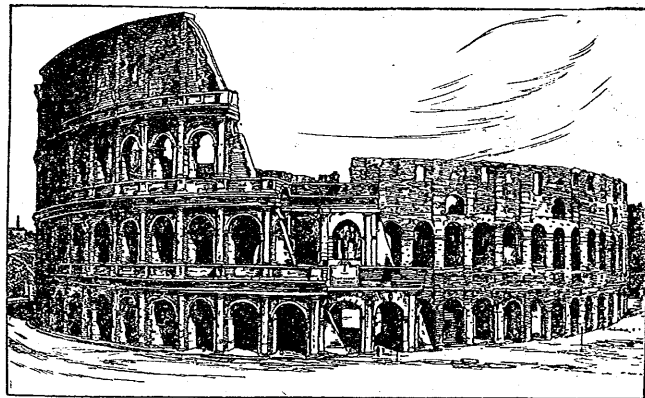
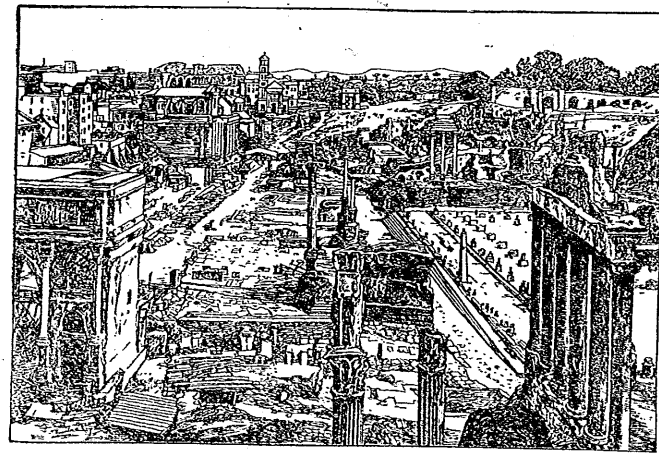
ローマ帝國の最も盛大なりしは、第一二世紀の頃にして、其の版圖はヨーロッパ・アジア・アフリカの三大洲にまたがり、首府ローマは四方の富を集めて、壯麗善美、萬世不朽の都府たるを誇れり。然るに北方諸民族の侵入漸く劇しきに及び、驕奢に染み榮華に酔ひて柔懦風を成せるローマ人は、其の勢を阻止すること能はず、西暦三百三十年、コンスタンチン帝は遂に都をビザンチンに遷すのやむなきに至れり。是より後、さしもの都城も蠻人の蹂躪する所となり、宮殿堂宇其の他壯麗なる建造物は多くは破壊せられ、市民離散して年々其の數を減

じたれば、いはゆる不朽の大都も、何時しか荒廢の極に達せり。

今のローマ市の繁華なる街路及び王宮諸官衙の在る處は、元のローマの邊隅にして、昔大廈高樓の櫛比せしあたり、今はたゞ荒廢寂寞の巷たるのみ。ローマに遊ぶ者をして深き感興を催さしむるは、車馬絡繹たる街路にあらずして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる廢墟、殘壁なりとす。

ローマに遊びて先づ觀るべきは、フォーラムの跡なり。フォーラムは丘陵に圍まれ、中央政府議會裁判所等總べて此の大國を支配せし機關の在りし處にして、一千八百

七十年、イタリア政府之が發掘を開始せしめて、約千五百年間は全く土中に埋没したるき。丘陵の上より見下せば、三々五々並び立てる大圓柱の上に石梁の將に落ちんとして危く支へられたるあり、屋壁の崩れて石柱のみ空しくそびえたるあり。傾ける石階、覆りたる礎石、所在に雜然たり。



フォーラムの東方に宏大なる楕圓形の建造物の半ば崩れたるを見るべし。これ即ちコロセウムなり。古代ローマ人は勇猛なる行爲を好み、アジャ・アフリカ等より獅子・虎・豹等の猛獸を集め來りて、奴隸をして之と格闘せしめ、一般公衆をして之を見物せしめたり。コロセウムは即ち其の格闘場の稱なり。周圍五百二十五メートル、長徑二百十

八メートル、高さ四十八メートルあり。優に四萬五千人を容るゝに足れり。其の落成式の際の興行は、百日の久しきにわたりて、五千頭の猛獸を殺せりといふ。毎年興行の始るや、國民は狂喜して四方より來觀せり。中世諸國より來りし巡禮者等は此の壯大なる建造物に驚きて、

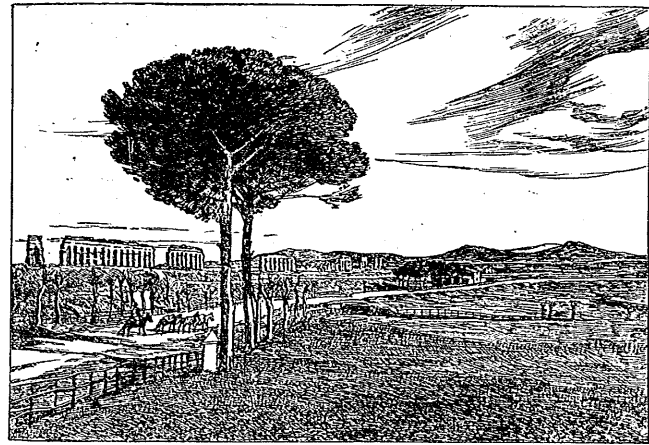
コロセウムの立てる限はとこしへにローマはあらん。コロセウムの崩れん時は諸共に都も絶えて跡なけん。ローマの市の亡びなば、人の世界も共にまたと歌へり。今や其の内部は悉く崩壞して、僅かに外壁の半ばを残せるのみ。コロセウムを見るは月夜を最も良

高嶺牧四
高嶺牧四

しとす。巨大なる周壁の一部は明光に照らされ、一部は暗黒に鎖され、各層幾百の窓漏る光を以て、縦横上下に明暗の紋様を織りなす壯觀實に名狀すべからず。

又驚くべきはカラカラ帝の浴場なり。古代ローマ人は入浴を好み、到る處に浴場を設けたりき。なかんづくカラカラ帝の造れる浴場は其の最も廣大なるものにて、千六百の浴席あり。浴室の外、圖書室、談話室、化粧室、游泳場、遊戯場、庭園等の設ありき。今は唯大理石もて張れる床の一部と其の周壁の一部とのみを存すれども、附近に散亂せる大理石の彫刻を以て見るも、室内の裝飾の如何に華美を盡くしたりしかを知るべし。

ローマの郊外カンパニヤの平原をアルバ山の方へ通ずる一條の廣き道路あり。昔は繁華なる街道にして、勝誇りたる猛將勇士の意氣揚々として、アジャより、アフリカより、市民歡呼の聲に迎へられてこゝに凱旋せしなり。此の道と殆ど並行して、高架水道の殘礎あり。蜿蜒として原野をわたりて、遙かにアルバ山



高橋女四

に向へり。其の壁の高き處は二十メートルに及ぶ。カラ帝の浴場も其の水を此の水道に仰ぎしなり。野邊の千草の霜枯れて、滿目蕭條たる時、アルバの山の端を出づる月の靜かに殘墟を照らすを見れば、誰か俯仰懷古の情を禁ぜんや。

第二十六課 大 樹

森の好きな私は、此の夏輕井澤の落葉松の森の中に小さい家を建てて、得意になつてゐた。どの窓から眺めても、見渡す限の草と木、其の末は遠山に連なつてゐる。これで大いに詩囊が肥えるくらゐのつもりで、内心頗る滿悦してゐると、ロンドンの本屋に頼んでおいたグレ

「卿の自叙傳が屈いた。それを開いて挿繪を見て、あゝ、やはりだめだと嗟歎した。

其の挿繪といふのは、銀の樅と題して、グレーが自分の家の庭の大樹の下に立つてゐる寫眞である。其の樅の木は百二三十尺もあるであらうか、私は其の寫眞を見て、或莊嚴な感じに打たれた。千年の風雨に打たれた高い木が、すつくと青空にそびえてゐる姿を見ると、頭の下るやうな氣がする。子供の時から斯ういふ大樹の下に生ひ立つたから、グレーにはあのやうな悠揚迫らざる風格が出来てきたのだ。私はさう思つた。さうしてそよ風に搖れる低い落葉松の姿を、寂しい心持で眺め渡

高讀如四

した。斯ういふ木を毎日見てゐたのではだめだと思つた。

私はイギリスに遊ぶ毎に、一木能く森をなすやうな大きい樅の木を、汽車の窓から眺めて感歎する。あゝ、いふ樅の古木を眺めながら、イギリス人は生ひ立つてゐるのだ。私は又オランダのヘーグ郊外にある大森林の菩提樹とぶなの雄姿を忘れることは出来ない。イギリスに先立つて議院制度を世界に示したオランダ、あのヨロッパの一角で、孤壘に據つて新教と民權を擁護したオランダだけに、やはり大樹を保存し、讚美することを忘れない。パリ郊外のフォンテーヌブローの森も壮大

だ。アメリカ合衆國ではニューヨークの榆の木、蒼空に迫る老樹を打仰ぎながら、私はよく初代植民人の心意氣を想望した。

北京の町では、雄大な槐の木が遊子の魂をとらへる。蘇東坡が三槐堂の文中に、王祐が大樹を庭に植ゑて、子孫に偉人の出ることを待った心持を歌つて、王城の東、晋公のいほりせるところ、鬱々たる三槐、これ徳の符。あゝ、よいかな。といったのも同じ心であらう。老樹を崇むる心は、人の世の悠久を思慕する心である。限なく天に向つて伸びゆく巨木の姿には、紛々たる眼前の得喪を忘れしむる威容がある。斯かる大樹を多く保存する國民

のみが、千波萬波起伏重疊する治亂興亡の外に立つて、久遠の生命を保存するのであらう。社會問題といひ、時代思想といひ、經濟政策といひ、それ等一切の現實問題の根柢には、大地にとつかと根を下し、大空にすつくと伸上る大樹の力が無くてはならない。

斯く大樹を讚美する情操を抱いた私は、つい先頃高知縣に遊んで、長岡郡大杉村の山腹に生えてゐる日本一の巨杉を見た。樹幹二百尺、亭々として雲に入る此の大杉は、二千年の齡を重ねてゐるといふ學者の推定である。そこに日本國民の運命の暗示を見たやうに、私は嬉しかつた。さうして私は五十鈴川のほとりに立ち並ぶ

莊嚴な杉の林を思ひ浮かべた。それはいろくゝの意味で日本國民の象徴である。(經濟隨想所載鶴見祐輔ノ文ニ據ル)

第二十七課 園藝

杖立てて大角豆は、する宿りかな 蓼太

背戸の僅かなあき地にも四季折々の野菜物を作つておけば、小人数の家では年中新鮮な野菜を食べることが出来、又朝夕に其の成長して行く様を見るのも此の上ない樂しみである。大根・蕪はうれんさう春菊・芋・豆・瓜・茄子・葱など、野菜物の種類は頗る多く、それゝ氣候や地味の關係によつて、栽培の適不適も自ら異なつてゐる。適當な種や苗を選び、栽培に注意して、今年は去年より一層見事な出来ばえを見るやうになれば、興味は益々深くなるであらう。

花も好く、實も好いものには、梅を始として、杏・桃・李・林檎等がある。花は美しくないが、枇杷・葡萄・柿・栗・蜜柑の類の枝も重げに實のつてゐるのは、見るからに氣持がよい。總べて果樹は、毎年花を開く前と實を採つた後で肥料をやり、又時を選んで缺を入れゝば、好い實がたくさんなる。又珍しい苗木を植ゑたり、接木をしたりして、好い果實を結ばせたならば、興味と實益と二つながら收めることが出来る。

柿賣りし價も里の話かな

保吉

田家晩秋の風情がうかゞはれる。

今日になつて菊作らうと思ひけり 二水

黄や白や紅や、大輪小輪様々の花の咲揃つてゐる菊畠の美しさは言語に盡くし難い。牡丹芍薬朝顔などの變種を集めるのもおもしろく、又年々苦心して新しい變種を作り出すのも樂しみである。近頃は又コスモスダリーヤ、チューリップ等種々の西洋草花を栽培することが盛に行はれる。種蒔株分から花を咲かせるまでの丹誠は一方ではないが、咲揃つた花の美しさを見ると、長い間の辛苦も忘れられる。

盆栽を仕立てるのも、庭園を造るのも、共に園藝である。

高讀女四
高讀女四

幾坪もない庭の面にも、飛石を敷き、常磐木を植ゑ、物さびた様に造りなすのは、我が國特有の技術である。廣大な富豪の庭園、寺院の奥庭などになると、泉水もあれば、築山もあり、密林の下、小暗い細道をたどつて行くと、東屋があつて、廣々とした景色が見られるなど、變化の妙を極めたものも少くない。

斯く園藝には蔬菜栽培、果樹栽培、花卉栽培、造園等いろいろあるが、何れも自然を相手とする仕事であるから、高尚な樂しみを與へ、優雅な趣味を養ふものである。終日の業務に疲れた人も、これによつて再び身心を新にすることも出來、又これによつて一家團樂の樂しみを

増すことも出来るであらう。

第二十八課 愛

燒野の雉、夜の鶴、さては乳虎の怒、舐犢の愛、子を思ふ情は禽獸にも備れり。旅雁の空に叫ぶも、牧羊の野に呼ばふも、友に對する親愛の聲にあらざるはなし。愛は己を思ふ心を推して他に及すに外ならず。己の苦を除かんとする心を廣めて人の苦を除かんとし、己の樂を得んとする心を廣めて人に樂を得しめんとする同情の心なり。此の同情の心は、親に對しては孝となり、子に對しては慈となり、夫婦の間にては和となり、兄弟の間にては友となる。一般尊長に對して愛敬し景慕す

るの心も、亦其の發現といふべし。更に之を廣めては、愛郷心となり、愛國心となり、社會公衆に對する愛となり、全人類に對する愛となる。慈善、仁惠、哀憐等皆愛の種類にして、宥恕、愛撫、慰藉等愛の發動にあらざるはなし。一世を指導して百代の儀表となれる偉人は、皆博く愛を宣傳して、人類の幸福を進めんとしたるものなり。孔子、釋迦、キリストの如きは皆然り。我が國御歴代の御仁慈は申すも畏し。東西古今の宗教家、教育家、道德家の事業も究極する所亦愛に歸す。

愛は萬物を生育する太陽の光に比すべく、愛ありて始めて人生の妙味あり。社會の平和を得るも、國家の安寧

を保つも、愛の結合力に外ならざるなり。

第二十九課 峠の茶屋

「おい」と聲をかけたが、返事が無い。

軒下から奥をのぞくと、すゝけた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が寂しさうに庇からつるされて、屈託げにふらりく／＼と揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、側には小銭が散らばつてゐる。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せである白の上にふくれてゐた鶏が、驚いて目をさます。く／＼く／＼と騒ぎ出す。敷居の外に、竈が今しがたの雨にぬれて、半

分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜が掛けてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下はたきつけてある。

返事が無いから、無斷でずつとはいつて、牀机の上へ腰を下した。鶏は羽ばたきをして、白から飛下りる。今度は疊の上へ上つた。障子がしめてなければ、奥まで駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、こけつこつこといふと、雌が細い聲で、けゝつこつこといふ。まるで自分を狐か犬かのやうに思つてゐるらしい。牀机の上には一升枡程な煙草盆が閑靜にひかへて、中にはとぐろを巻いた線香が、日の移るを知らぬ顔で、頗る優長にくすぶ

つてゐる。烈しかった雨は次第に収る。

暫くすると、奥の方から足音がして、すゝけた障子がさ
らりとあく。中から一人のばあさんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃え
てゐる。菓子箱の上には小銭が散らばつてゐる。線香は
のんきさうにくすぶつてゐる。どうせ出るにはきまつ
てゐる。しかし自分の店を明放しても苦にならないと
見えるところが、少し都とは違つてゐる。返事が無いの
に、牀机に腰を掛けて、何時までも待つてゐるのもおも
しろい。其の上出て来たばあさんの顔が氣に入つた。
二三年前、高砂の能を見たことがある。其の時、これは美

しい活人畫だと思つた。杉ばうきをかついだばあさん
が出て来て、そろりと後向になつて、ぢいさんと向ひ合
ふ。其の向ひ合つた姿勢が今でも目につく。自分の席か
らはばあさんの顔が殆ど眞向に見えたから、あゝ、美し
いと思つた時に、其の表情はびしやりと心のカメラへ
焼き附いてしまつた。茶店のばあさんの顔は、此の寫眞
に血を通はした程似てゐる。

「おばあさん、此處をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「あいにくなお天氣で、さぞお困りでござんしよ。おゝ」

おゝ、大分おぬれなかつた。今火をたいて乾かして上げましょ。」

「其處をもう少し燃しつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、唯今たいて上げます。まあお茶を一つ。」

と立上りながら、しつゝと二聲で鶏を追下げる。「こゝこゝ」と驅出した鶏は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。雄の方が逃げる時、駄菓子の箱の上へ糞をした。

「まあ一つ」とばあさんは何時の間にか刳拔盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆書

きの梅の花が三輪、無雜作に焼き附けてある。

ばあさんは袖無の上からたすきを掛けて、竈の前へうづくまる。自分は懷から寫生帖を取出して、ばあさんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。こゝらは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「あいにく今日は……、さつきの雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の内がばちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺餘り吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かる。」

といふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、微かなあとをまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。お陰で生返つた。」

「いゝ、工合に雨もはれました。そら、天狗岩が見えます。曇りがちな春の空を、もどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の思切よく通り抜けた前山の一角は、未練もなくはれ盡くして、老婆の指さす方に、あらけづりの柱の如くそびえるのが天狗岩ださうだ。（夏目金之助「草枕」ニ據ル）

第三十課 國語と愛國心

高潔勇健なる大和魂と相待ちて、古來我が國民の共同團結を固うしたるものは、純正溫雅なる日本語なり。日本語は即ち日本國民の間に流るゝ精神的血液にして、日本民族は此の精神的血液によりて統一せられ、此の最も鞏固にして且永遠なる連鎖の爲に散亂せざるなり。されば一朝國家の大事あらんか、日本語の響く限り、幾千萬の同胞は、共同一致直ちに難に赴き、あくまでも力を盡くして、死して悔いざるなり。若し又慶報に接せんか、北の果も南の端も、一齊に君が代を歌ひて、國家の幸運を祝福するなり。

日本語は又我等日本人の慈愛深き母なり。我等の生まるゝや、此の母は我等を其の膝の上に迎へ取り、懇に國民的思考力と國民的感動力とを教ふるなり。此の母の慈愛や誠に天日の如し。いやしくも此の國に生まれ、此の國民たり、此の國民の子孫たるもの、誰か此の光を仰がざるべき。

國語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念を留む。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて眠に就かんとせし時、母君は如何に優しき聲にて寢よとの歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心にゐるふざけなどして遊び廻

りし折、厳しき父君は如何に嚴かなる教訓を垂れ給ひしか。さては秋の山路に分入りて餘念なく栗の實を拾ひたる、あるは春の麗かなる野邊にれんげさうなどを摘歩きたる、總べて其の當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、えも言はぬ快感を我等に與へずんばやまず。

次には學校にての言葉、職業により、身分により、地方によりての言葉等、皆それらの生活を其の上に反映す。顧みて過去の生活を思ひ、目のあたり現在の幸福を思ふ時、何人も此の言語の恩澤を蒙り、此の言語に感謝の意を表せざるはなかるべし。

國民が其の國語を尊ぶことは一種の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、情の上より自國語を愛し、理論の上より其の保護統一に従事し、以て國民の愛國心を養成せんことを力む。

凡そ何れの國を問はず、いやくも國家の觀念の上より、其の一員たるに恥ぢざる人物の養成を以て教育の目的とする以上は、先づ其の國の言語、次に其の國の歴史、此の二つをないがしろにしては、決して其の功を收むること能はず。これ國民たるものの須臾も忘るべからざる事なり。(上田萬年「國語のため」ニ據ル)

高等小學讀本 女子用 卷四終

高讀女四

昭和二年九月十二日 發行

昭和十五年七月一日 修正印刷

昭和十五年七月三日 修正發行

(非賣品)

著作權所有

著作
發行者兼

文部省

印刷者

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

